

野球においてファーストストライクを振ることは結果につながるのか

学生氏名 島田 大輝

指導教員 教員氏名 土屋 哲

研究背景

野球の打撃指導において「ファーストストライクを振ること」は、長年有効な戦術として指導されてきたが、その根拠として示されるデータは主にカウント別打率に限られており、ファーストストライクへの対応が打撃結果に及ぼす影響を直接検証した研究がなかった。また、競技経験上、凡打の増加や四球減少など不利に働く場面も見られ、疑問に感じた。

研究目的

本研究の目的は、野球におけるファーストストライクへの対応が打撃成績に与える影響を明らかにすることである。具体的には、高校生・大学生・社会人を対象に、ファーストストライクを振ることの有効性に差異が見られるかをデータに基づいて検証し、競技レベルの違いという観点から打撃指導の妥当性を再検討することを目的とする。

研究方法

本研究では、高校生・大学生・社会人の三つの競技レベルを対象に、公式大会の打席データを用いて分析を行った。各カテゴリにおいて、ファーストストライクを振った打席と振らなかった打席に分類し、打率および出塁率を比較した。あわせて、ランナー状況およびファーストストライクの球種別の集計を行い、状況の違いが打撃成績に与える影響についても検討した。なお、ボール球のみの四死球の打席および送りバントは分析対象から除外した。

分析結果

分析の結果、競技レベルが高くなるほど、ファーストストライクを振ることによる打率向上の効果が大きくなる一方、高校生および社会人では、ファーストストライクを振らなかったことによる出塁率向上の効果が高い傾向が見られた。また、ランナー状況や球種によってその効果は異なり、ファーストストライクを振ることの有効性は競技レベルや状況によることが示唆された。

考察・結論

ファーストストライクを振ることが打率と出塁率を総合的に見て有効である場面は、カテゴリや状況によって限定的であることが明らかとなり、従来指導されてきた「ファーストストライクを振る」という考え方自体が誤りであるとは言えないものの、カウント別打率のみを根拠とした一律の指導には再考の余地があると考えられる。